



Title	同僚とのオンライン懇親会におけるほめと応答の発話連鎖：「同じである」ことへの指向と連携
Author(s)	福永, 佳代子
Citation	日本語・日本文化研究. 2022, 32, p. 209-223
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90729
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

同僚とのオンライン懇親会におけるほめと応答の発話連鎖 －「同じである」ことへの指向と連携－

福永 佳代子

1. 研究背景と研究目的

コロナ禍において、企業では普段の雑談の重要性を再認識する傾向が見られ、ここ数年でオンライン懇親会が珍しいものではなくなった。懇親会は、複数の人が集まり、互いが理解を促進しようと働きかける場であり、相手をほめる行為が見られる。ほめる行為は相手と丸い関係を保ちながら、相手を受け止め、相手に同意する行為であると田辺 (1996) は述べている。懇親会におけるほめる行為は、相手について知っていること、観察を通しての発見を伝えることで、相手への関心を示し、会話を円滑にする機能を持つと筆者は考える。ほめに対する応答は同意・不同意・回避等様々な方法があるが、日本語教育の教科書で取り上げられているスタイルには偏りがあり (犬飼 2018)、ほめと応答の会話の最小の単位である隣接ペアのみ取り上げられていることが多い。しかし実際は隣接ペア後にもやりとりが続くため、自然会話を反映したものになっていない。

本研究は同僚との懇親会で、ほめ手と受け手は一連のやりとりにおいてどのようにふるまい、会話を展開し、ほめる行為を達成しようとしているのかを分析する。本研究の目的は、日本語母語話者の同僚との懇親会におけるほめと応答の一連の発話連鎖を記述し、参加者の相互行為を分析し、日本語の会話教育に応用するための基礎研究とすることである。

2. 先行研究

2.1 ほめの定義

ほめは、相手を心から高く評価する「実質的ほめ」と会話を発展させるためや依頼の前段階など別の意図を含む「形式的ほめ」があり (川口他 1996)、古川 (2001) はこれに加え、皮肉・嫌味など「ほめ」に見せかけるものを挙げているが、本研究の対象は、相手のフェイスを脅かすほめは含まず、相手との人間関係をよくしたり、いい関係を保とうとする主体的に働きかける点を重視する。田辺 (1996) はほめる行為の引き金になる感情「すごい」等の表現や「わぁ」等間投詞、そして相手への賛意から評価、更には勧め、励まし、依頼など評価によって引き起こされる行為までを「ほめ」としている。本研究では目の前にいる相手を肯定的に評価する言葉が表れているものや、ほめの引き金になる感情表現等明示的な表現と、間投詞等相手への肯定的な評価が暗示されているものは対象とするが、田辺 (1996) の評価によって引き起こされる行為はほめとしては扱わない。

本研究のほめの定義は小玉 (1993, 1996) を基に「話し手が聞き手或いは聞き手の家族

やそれに類するものに関して“よい”と認める様々なもの或いはことに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的に或いは暗示的に、主体的に働きかけ、肯定的な評価を与える行為」とであるとする。例えば、「おお」というような間投詞でも、相手に対する肯定的な評価を与える行為はほめとする。

2.2 先行研究と本研究の課題

ほめと応答は会話の隣接ペアであるが、Schegloff (2007) は隣接ペアの応答の産出について、一般的に同意が不同意より選好 (preference) され、同意 (選好される応答) は、簡潔で要点をついており、不同意 (選好されない応答) は、説明や言い訳を伴って遅れ、表現が弱められる特徴を持つが、評価の構造は例外であり、必ずしも同意が選好されないと述べた。Pomerantz (1978) は、ほめの応答は、同意が選好されるというモデルから逸脱しており、ほめられた側にはほめてくれた感謝を示したいという欲求と、自画自賛を避けようとするジレンマがあり、同意、不同意の両極端ではなく、両方の特徴をもっていると述べている。特に日本語の場合は熊取谷 (1989) が「謙遜の法則」を優先し、相手からの評価に対して全面的な賛成をせず、不同意を示す方が無標であるとしている。

「謙遜の法則」(熊取谷 1989) はコーサティアンウォン (2014) の日タイ比較の調査結果にも表れており、日本語母語話者のほめの返答の特徴は、親しい関係においては回避が多く、自分についての否定的な要素を含んだ理由や情報が含まれたものがあり、「疎」の関係においてほめの返答は打消し型又は「打消し型+回避型」が極端に多いと述べている。又、タイ語母語話者の親しい関係のほめの返答は、ほめ手の誠意を疑うような冗談(「本気でほめてるわけじゃないでしょ」等)で、親しさを表す点に日本語母語話者との違いが見られるとしている。この日本語母語話者との違いについて古川 (2007) は、このようなタイ語の返答の例は日本語では稀であり、受け手が疑ったりすると、ほめ手のポジティブ・フェイスを傷つけることになり、日本語教育の上で、学習者に注意が必要だと述べている。

しかし、このような日本語の特徴が、日本語母語話者のほめと応答の自然会話にどのように表れるのかはあまり分析されていない。日本語のほめと応答の先行研究では、自然会話をデータとするものは少なく、自然会話をデータとする研究でも調査協力者が学生二人であるものが多く、社会人の実際の場面をデータとする研究は管見の限り見当たらない。データの属性だけでなく、参加者の人数にも偏りがあり、会話の多様性が反映されているとは言えない。本研究では日本語母語話者の自然会話の中でも三人以上の多人数会話で、初対面ではなく、共通の知識と経験を持つ、比較的親しい同僚の雑談に焦点を当てる。

榎本 (2007) は、多人数会話の特徴として、反対意見や疑問に同意してくれる別の参加者が側にいる場合、発言を行う上での心理的負担の軽減を挙げている。これについて、中川 (2016) では、遠距離介護をしている家族と、福祉支援員のやりとりにおいて、家族の

言いさしを、支援員が完了することで、ケア回避の意思決定の責任を一部引き受ける姿勢を示した。このような多人数会話の参加者の連携については、主に意見が対立する状況において見られることが先行研究で指摘されており、ここでは、家族と福祉支援員は同じ考えを持つ者としてふるまっているが、ケア回避に対する世間一般の反対意見や疑問視を想定した上での連携だと筆者は考える。多人数会話のジェスチャーにおいても参加者が連携し、「同じわれわれである」ふるまいをすることが指摘されている。城 (2018) は、多人数会話において同時に同じジェスチャーをする「ジェスチャーの同期」が生じる過程に着目し、ジェスチャーの同期が偶然に生じるものではなく、予測可能な手掛かりとして、場を組織するのに用いられ、同じジェスチャーをすることで協調的な行為や活動に参加し、連帯感や一体感の創出にも貢献しうると述べている。

多人数会話における参加の枠組みについて、Lerner (1993) は教師が生徒に語りかける行為を分析し、参加者は相互行為の相手を1人1人の個人を単位とするのではなく、2人以上の集まりである1つの組織のような社会単位として扱うことがあると述べている。

Kangasharju (1996) は社会福祉事業の代表者と保険事業の代表者の間で意見が対立している状況で、複数の参加者の相互行為を通して生まれる連携を分析している。連携のための同意を示す方法には、複数の参加者の集合体があるメンバーのターンの完了、ターンの一部の繰り返し等があり、同意を示す相手は、話し手が同意している相手ではなく、他の参加者であることが多いと述べている。その他、連携を示す言語的な装置として、話し手の他者の言葉の使用、合意のアップグレード、他の話者の言葉の言い換えを挙げている。

Gordon (2003) は義理の4人家族という相互作用外の関係が、どのように複数の参加者が連携する基盤となるかを論じ、3つの連携の方法を論じた。1つ目は意見が対立する状況ではなく、情報を共有する2人が他の参加者に情報を伝えるための「ターンの共有」、2つ目は子供の「親」という相互作用外の関係性が基となり、「子育て」のために「親」として2人が交互に機能的に同等のターンを行う「パラレル・ターン」、3つ目は経験に基づく考えを他の参加者が支持し、それに合致した自分の話をして提案をする方法「スキーマ・エコー」である。

以上のように、多人数会話の先行研究では、特定の場面と状況での二者会話の違いとして複数の参加者の連携が挙げられているが、日本語のほめの応答の発話連鎖において、多人数会話ではどのような相互行為が見られるのかは分析されていない。又、上述したように、日本語のほめと応答において自然会話をデータとする研究は調査協力者が学生二人であるものが多く、社会人の実際の場面をデータとする研究は少ない。そのため、共有する知識や経験を持つ参加者の職場の同僚という相互作用外の関係性が参加者の連携につながる相互行為についても議論されていない。その分析には隣接ペアだけでなく、一連の発話連鎖を観察する必要がある。更に、ほめに対する応答は、同意・不同意の観点だけでなく、参加者が共有する経験や知識を持っているのかどうかという認識性が発話を展開させてお

り (Heritage 2012), 誰が, 何を, どのように, 誰よりも知っているのかという問題についての合意「認識的調和 (epistemic congruence, Hayano 2011)」の形成に至る一連の相互行為を取り上げる必要がある。本稿の課題はほめに対する応答が不同意あるいは回避である, 意見が完全には一致しない状況で, 共有する知識や経験を持つほめ手が, 発話連鎖において手掛かりを基に他者と連携し, 認識性が「同じであること」を指向する相互行為を考察することである。

3. データと分析方法

分析に使用したのは, 職場の親しい同僚とのオンライン懇親会での多人数の雑談 (約120分×2) の録音及びその文字化資料である。録音データは, 懇親会の初めから最後までを会話参加者のうちの一人の自宅で, 携帯電話のレコーダーでその参加者が録音し, 筆者に送ってもらった。話題の指定はなく, 飲食をしながらの自由な雑談である。1つ目のデータ (以下データ1と記す) は3か月にわたる研修チームの最終日のチーム賞と個人賞受賞式後の男性メンバー5名の懇親会で, 2つ目のデータ (以下データ2と記す) は職場の同じチームに所属している女性5名と男性1名の, 社外での親睦を深め業績につなげる目的で行われた懇親会である。どちらもメンバーは同じ会社に属しており, 人事に関わる上下関係はなく, 比較的親しい関係である。参加者はデータ1は研修と研修のテーマである会社の課題について, データ2は社内の日々の人間関係や仕事の内容について知識と経験を共有している。

本研究では, 会話分析の手法を用い, 会話参加者の相互行為を分析する。まず, 録音の文字化資料から, 他者をほめる発話とその応答の発話連鎖を話題ごとに抽出し, データコレクションを作成した。次に, ほめと応答の発話連鎖を筒井 (2012) の話題内容の質的な異なりを判断する基準を援用し, 話題ごとに分けた。ほめの対象は, 熊取谷 (1989)の分類を参考にし, 「所持物・外見」「才能・技術・知識」「性質」「習慣」「他者」「環境」に分けた。ほめの応答は, 大きく「同意」「受け入れ」「回避」「不同意」に分けた。

「受け入れ」とは, ほめの行為を受け入れることであり, 「同意」「不同意」はほめという評価の内容に対して賛成か不賛成かを表す立場とする。「回避」は, 焦点をずらしたり (張 2014), 冗談を言ったりしてほめの評価に対する受け手の立場を明らかにしないことである。

本稿では, 4つの会話断片を記述し, ほめに対する応答が不同意である場合と, 回避である場合は, ほめ手の連携がどのように表れるのか, またほめ手とほめの受け手が互いに共有する知識や経験に対するそれぞれの認識性を主張し, 立場が異なる状況でいかにして他の参加者の認識性と「同じである」ことを指向し, 認識的調和が形成されるのか, 発話連鎖の相互行為を分析する。

4. 分析

研修や職場での知識や経験を共有する会話参加者のほめに対する応答の会話断片 4 つのうち、まずほめに対する応答が不同意である発話連鎖を 2 つ (断片 1, 2) 取り上げ、次に回避の発話連鎖を 2 つ (断片 3, 4) 取り上げる。同意か不同意かによって異なる会話参加者の連携の方法を分析する。

断片 1 は、データ 1 の断片で、ほめの対象は研修での個人賞を受賞したという能力である。懇親会の当日の研修で個人賞を受賞した参加者 I に対する他の参加者の祝福の言葉から話題が始まっている。なお、トランスクリプト中に用いた記号は、西阪・串田・熊谷 (2008) にしたがった。

断片 1 【個人賞受賞】ほめの対象「才能・技術・知識」

- | | | | |
|------|----|--|------|
| 10 | H: | チームで賞とるより,個人で賞とる方が↑大変で°すよね° | ほめ |
| 11 | I: | いやあ::,ほ↑んと,そうですよ:: | 受け入れ |
| 12 | | (0.7) | |
| 13 | | なんか,よめさんに,↑わ::いとれたよ,つていったら,↑あんたの力じゃ | 不同意 |
| 14 | | ↑な↑いやろ,あの,チームの力やろ,みたいな.hh[hh | |
| 15 | T: | [hhhh | |
| 16 | I: | ¥そ.hh パシッと¥言われ↓[て hh. | |
| 17 | H: | [いや,いや. | |
| → 18 | T: | ¥こじ¥個人賞つ[す。 | ほめ |
| → 19 | H: | [個人で°すよ°. | ほめ |
| 20 | I: | hhhh | 回避 |
| → 21 | H: | 個人,<↑完全>個人ですよ. | ほめ |
| → 22 | | いや::,でも,よかったです.I さん,取ってもらって.= | |
| 23 | I: | =いや:: | |
| 24 | | (1.5) | |
| 25 | | いやあ,でも,真剣な話:(.),あの,その:なに?, ,あの:,僕のスラ:,パワポの中に | 回避 |
| 26 | | あの,みなさんの顔写真入れたのが:,個人的にはあれが:(.)こ↓う:(0.5),なんだろう, | |
| 27 | | 効↑いたのかな:と,思ってるんですけど,ほ↑んとに,ありがとうございます | |
| 28 | T: | いえい[え | |
| 29 | H: | [いえ[いえ | |
| 30 | K: | [>いえいえ< | |
| 31 | | >いや<,なんか,こう,す↑ご↑い,なんかこう,↑凝↑縮されてましたよ(ね), | ほめ |
| 32 | | なんか,あの:,I さんの:,その,なんか,いろいろ学ばれてきたこととか::, | |
| 33 | | あと人柄とか,みんながこう::,みんな↑全部,凝縮されてる感じで:(.)うん, | |

- 34 す↑ごいよかったです.
- 35 I: いやい¥や, hh#ほん.h と#Kさんの, サプライズのあれにはもう, 不同意+回避
- 36 ↑めっちゃびっくりし¥ましたよ¥hh[h] (ほめ返し)
- 37 K: [>いやいやいやいや< 不同意

10行目のHのほめ「大変であること」はIは11行目で受け入れつつ、13,14行目では自分の力ではないと不同意を示している。それに対しほめ手は、17行目でHの異なる意見の提示を契機に、Tが18行目で前の10Hの「個人賞」という言葉を繰り返し、TとHが同じ意見である者として主張している。19Hは、それに重ねて発話を開始し、更に「よ」をつけて、対象をよく知っているという認識上の優位性 (Hayano 2011) を示している。20Iが笑いで受け止めるとHは21行目で「完全」と言う言葉を付け加え、より強い主張にアップグレードしている。受賞は個人のものであると主張した上で、その受賞したこと自体に焦点をずらして22行目で「よかった」と評価し、Iが受け入れやすいように調整している。それに対し、25-27Iは受賞理由を「全員の顔写真を入れたこと」であると説明し、自分の力ではないと今度は暗示的に主張する。一番初めのほめ (10H) の後の、ほめ手の同じ言葉の繰り返しによるほめ (18T,19H,21H) は、短い発話であり、「直ちに、簡潔に、直接的に産出される (串田・平本・林 2017)」という隣接ペアの優先応答の特徴がみられ、ほめ手が他のほめ手と同じ意見であることを示している。ほめの受け手の応答 (11-14I,25-27I) は長い情報提供であり、「遅れて、複雑に、間接的に産出される (串田・平本・林 2017)」という非優先応答の特徴が表れている。Kは34行目でTの「よかった」という評価に「すごい」を付け加えてアップグレードし、同じ意見である者という立場に指向し、その「すごいよかった」理由をIの人柄や知識を挙げて再度具体的に、Hのほめを補足している。

以上のように、ほめ手T,H,Kが連携して言葉を繰り返し、他の参加者の言葉を利用して交互にほめることで、個人ではなくあたかも一つの組織であるかのように連携している。その後、35行目でIはほめを受け入れず、Kをほめ返して話題をそらす。この会話データでは、同じ「研修」という経験を共有する者としてほめ手と受け手が異なる認識性を主張し、連鎖が拡張していた。ほめ手は、同じ意見を持つ他の参加者の言葉や評価を強めて繰り返し、追加説明をすることで連携していた。

断片2は、データ2の断片で、10行目より前の会話では、Yが4人兄弟の末っ子でありながら、職場では妹っぽく見られると話している。10Yの自己卑下に対して、11行目以降の省略部分ではYが会社では年下だから妹キャラになっているのではとTが話し、Mが同意している。ほめの対象は初めは31,33Mで「外見」であるが、49Tで「性質」に、54M,56,58Mで「才能・技術・知識」に変わっている。

断片2【妹キャラ】ほめの対象「外見」→「性質」→「才能・技術・知識」

- 10 Y: そんなに下,下っぽいかしらって思ってます.hhh 自己卑下
(11-30 行目省略)
- 31 M: hhhh.hh え,でもいいやん,その方がいいやん. ほめ
- 32 Y: え::↑安いですか※? 不同意
- 33 M: え,若く見える方が,なんか,なんか,その方がなんかいいんちゃうんって思うけど. ほめ
- 34 Y: (妹) っぽいとかって
(35-44 行目省略)
- 45 Y: しっかり[しないと:: 回避
- 46 M: [え:
- 47 Y: と思うんですよ.妹っぽいって(.)
- 48 M: えゝ＝
- 49 T: =いいやん妹キャラ[ラ ほめ
- 50 Y: [言わ[れる
- 51 M [う::ん
- 52 I: うん
- 53 Y: え:[::::::::::::ゝ 不同意
- 54 M: [しっかりしてると思う. ほめ
- 55 Y: え?しっかり[できてますかね::?しっかり,いつも,いつもしっかりしない 不同意
- 56 M: [う:んできてるできてる ほめ
- 57 Y: [と::と hhhhh¥思って¥
- 58 M: [できて[るできてる ほめ
- 59 T: [()
- 60 S: う:::ん
- 61 Y: なんかタ札の(.)発表とか,めっちゃ頑張ってるんで¥すけど¥.hhhh¥なんか¥.hh
- 62 もう(.)DY[さんに見てもらって
- 63 S: [>もう 20 分でできんのん<ゝ
- 64 Y: 2,3 分のために 20 分ぐらい準備して.hhhhhh なんかね.hh[hh
- 65 T: [積み重ねや
- 66 (3.0)
- 67 Y: もっと早くできればいいと思いながら
- 68 M: US ちゃん一時間ぐらいかけてるから.
- 69 Y: hhhhhh

断片2では、Yの自己卑下の発話が10行目であり、それに対してMが31行目で「その

方がいい」とほめる。Pomerantz (1984) は自己卑下には不同意が選好され、自己卑下の応答にほめが用いられることがあり、そのターンは早いタイミングで発話され、相手との発話と重ねることで自己卑下を遅らせると述べているが、46,48,54,56,58 行目でもその特徴がみられる。Y は 32 行目で不同意を示し、M は再度 33 行目で Y の外見をほめる。その後 35 行目から 44 行目は発話が途切れ、M のほめに対する応答として 45 行目の Y の発話は「しっかりしないと」と外見については言及せず、性質について述べ、ほめを回避する。そのターンである 48M の「えい」という異なる意見表明の短い発話を契機として、同僚としての Y についての知識を共有するほめ手 M と T の連携がみられる。T が間を置かず、Y の性質を 31 行目の M の言葉「いいやん」を繰り返してほめ (49T)、M と同じ意見であることが示されている。又スクリプトは省略したが、49T は 31M の言葉の繰り返しに加え、「妹キャラ」という 18 行目で T が用いた言葉を再度用いて、あくまで会社では Y が年下であるという会社での Y の立場、T が同僚として知っている Y についての知識を主張し、補足している。49T のほめを支持する他の参加者の相槌 (51M,52I) も短い発話で T と同じ意見であることを示している。それに対して Y が 53 行目で不同意を示すと、今度は T ではなく M が 54 行目で Y の能力に焦点を合わせて「しっかりしてると思う」とほめる。このようにほめ手が交互に同僚として共有する Y についての認識性を主張し、連携している。ほめ手 M や T は Y の自己卑下を暗示する発話に重なるようにして、49,54 行目でほめ、発話に参加する機会が競合している。T と M の連携に対して、十分に説明することより先に、53Y で T や M の妹キャラという性質のほめに不同意を示し、T や M との焦点のずれを修正し、55Y で能力のほめに不同意を示し、それぞれの認識性が主張され、連鎖が拡張している。

ほめが自己卑下に対する応答として用いられていたため、自己卑下の発話の流れが優先されていたが、断片 2 でも断片 1 と同様、ほめの不同意の連鎖において同僚としての Y の知識を共有するほめ手が、短い意見表明を契機にほめ言葉の繰り返しと追加説明により連携する行為が見られた。異なる点は、同僚としてアドバイスすることにより連鎖を一区切りさせている点である。61 行目で Y が Y しか知りえない直接経験を示し、Y の認識テリトリーの主張をすることで理由を正当化すると、それまでは同僚として知っている知識を主張していた T は、65 行目で Y の先輩としての立場から独立してアクセスした知識を示し、認識性を主張している。その後 3 秒の間があり、Y のこれまでのようなほめ手に対する疑義の提示はなく、67Y の発話では 64Y の自己卑下の発話の続きのみである。65T がほめではなくアドバイスであることから、M は 68 行目でほめ直しをせず、他の年下の同僚について話をそらし、Y を慰めている。話題の転換によって発話連鎖が終了していた点は断片 1 と共通している。以上、ほめに対する応答が不同意である発話連鎖を考察した。次に、ほめの応答が回避であり、ほめと応答の連鎖が繰り返されていない相互行為を分析する。

断片 3 は、データ 1 の断片で K がほめの受け手となっており、ほめの対象は「才能・技

術・知識」である。断片 3 に先行するやりとりでは、研修をふり返り、よくここまで来た
なという I の発話から話題が始まっている。

断片 3 【衝撃的な考え方】 ほめの対象「才能・技術・知識」

- 1 H: あの:K さんが[.,
- 2 I: [そうそう.
- 3 H: 辞書で,=
- 4 I: =そうそう.
- 5 H: 辞[書で三つに分けて:.,
- 6 K: [あ↑:::
- 7 T: hh
- 8 K: あ:::
- 9 なんか,や(.)↑やりましたね:,なん↓か[.:
- 10 T: [hhhh
- 11 H: ↑誰と↑何を↑どうやって:,み[たいな
- 12 I: [hhhhh
- 13 K: [(そうな)
- 14 I: [hhhh
- 15 T: [(4G のや[つ)
- 16 I: [hhhh
- 17 (4.8)
- 18 I: いや:,でも,↑あれは,>あれは<なんか,↑衝↑撃でしたね,なんか ほめ
- 19 その:,いや::,↑そんな考え方,↑確↑かにな::,みたいな.
- 20 T: う::ん 支持
- 21 K: いやあ:::,いや:,なんか:,(.)なんかもう,なんか, 回避
- 22 あの:,ミーティングの前に::,,
- 23 なんか,なん↑にもこう,資料ができてなくて::,
- 24 な↓んか:::, (1.5)なんか:,>作んなきゃな,なんか作んなきゃな<と
- 25 思っ:::,なんかもう,手当たりしだいに::,みていって::,=
- 26 I: =お↓[::
- 27 K: [>あ,そうだ<なんか,<↑辞書>(.)だったら,何かあるかも>
- 28 しれないな<と思っ:::,
- 29 I: [うん
- 30 K: だったら,そしたら,なんかちょっと気がついて:,ちょっと=
- 31 え,もう,もう,なんか,そう,¥もう,なんか¥hh,もう,なんかミーティング

- 32 直前だし、もう、#これ、これがあつたよし#、これでいこう、みたいな.h,
- 33 I: ふ:::[ん
- 34 K: [そういう(.).°少しあの、°軽いノリで、.h(いき)ました.h
- 35 H: °うん°
- 36 (2.5)
- 37 T: °それが °すべての出発点ですもんね.:= ほめ
- 38 (H) =>そうです[ね.:
- 39 (): [あれ↑::ね.:
- 40 N: [あれがよかった[ですね. ほめ
- 41 I: [うん、>そうそうそう<=
- 42 H: =あれっすね.:
- 43 あそこから、始まりましたも[んね.
- 44 I: [そう、↑本当に.
- 45 (3.0)
- 46 I: °う::ん°

1行目から5行目では研修メンバーが着想を得たきっかけとなったKの行為をHが描写すると、Iが18行目でKの考え方が衝撃的だったとほめる。それにTが相槌をうって支持を示すと、ほめられたKが21-25,27,28,30-32,34行目で、否定的な情報提供を笑いながらして、ほめを回避する。それに対する応答は、オーバーラップしたほめ直しではなく、Hが35行目で小さく°うん°と受け止める点でこれまでの不同意の連鎖と違っている。そして2.5秒の間(36行目)において、初めのほめ手Iに代わり、今度はTが37行目で、Kの考え方が「すべての出発点」だったとほめるが、Kの考え方を「衝撃的だ」と評価したものから、考え方が与えた貢献に焦点をあててKから焦点を遠ざけ、「もん」を使って理由を述べており、断片1,2のような明らかなほめ言葉のアップグレードはない。また、文末に「ね」を用いて研修を経験した者として認識上の共有性を示す働きかけがあり、これらのふるまいを手掛かりとして、次の38行目のターンで他の会話参加者が「ね」を用いて同じ立場を示すと、37行目のTのほめでは「それが」というKの領域であるというソ系指示詞を使っていたのに対し、39行目以降では「あれ」とア系指示詞が使われており、ほめ手が共有する経験についての言及になっている。39行目では「あれね」という短い言葉で同じ意見が示され、次のターンの40行目ではNが「あれがよかった」と37TのKの行為全体に焦点をずらしたほめに同意すると、初めのほめ手であるIが41行目で同意を示している。Hが43行目で37行目のTの「それが出発点」と言う言葉を「あそこから始まりました」と言い換え、Tを支持し同じ意見であることを示し、「ね」を用いて共有する情報であることを示している。又、40NではKへの明示的な言及はなく、ほめが受け入れられやすいよう

にデザインされている。38H-44I では、同じ経験と認識を共有する者としての発話が「直ちに、簡潔に、直接的に産出される (串田・平本・林 2017)」という優先応答の特徴を持っており、他のほめ手への同意を示している。ほめ手 I,H,T の 3 人が連携し、共有する経験の認識が「同じである」者としてふるまうことに指向していると言える。

断片 3 と同様にほめに対する応答が回避である断片 4 を取り上げる。断片 4 は、データ 2 の断片で、ほめの対象は「習慣」であり、1 行目より前の会話は、Y が持ってきている水筒や Y ができるだけ水を飲むようにしているという習慣の話題である。

断片 4 「ハーブティ」ほめの対象「習慣」

- 1 M: ↑T 代理も水筒持ってきましたっけ？
- 2 T: >そう<, Y さんを見習って::, やってみたけど::, 3 日ぐらいで↓
- 3 やめ¥た¥.h[hh
- 4 M: [あ,[そうなんですか .
- 5 ():() , けっ
- 6 Y: .hhh もうね,T¥おも¥, おもろすぎて::,
- 7 M: あ.h
- 8 Y: (0.9) <熱[湯>でしたもん.
- 9 M: [..hh
- 10 T: (ハーブティーを:), パン[パンに(入れてたら::),
- 11 M: [うん,
- 12 5 時ぐらいなっても冷めてなくて飲まれへん°ねん°h
- 13 M: h[hhhhh
- 14 I: [hhhhh[hhh
- 15 S: [↑へ:::
- 16 M: 今のおそらく[()
- 17 I: [す↑ごいね::へ::
- 18 M: へ::
- 19 Y: hhhh
- 20 M: で, さ湯を飲もうと思っ>たんです<か? =
- 21 T: =うん?
- 22 M: さ湯を, さ湯を飲んで, ↑体あつためようと思っ>たんです<か?
- 23 T: あ, 一応ハーブティーや↓ね↓んけど.
- 24 M: あ:[:(.)
- 25 I: [あ↓::[:
- 26 M: [なるほど=

- 27 I: =おしやれ[: ほめ
28 T: [(を出す) 時にお湯入れてんねんけど::, 回避
29 I: う[:ん
30 M: [うん>うん°うん° <
31 T: 冷めへんねん.h
32 Y: hhhhhh
→ 33 I: あ↑ちみたいな.=
→ 34 M: =計算しないと.
35 I: hhh

断片4は、データ2のもので、Yの習慣がほめの対象となっている。Mが1行目でTの水筒について触れ、Tが2行目で笑いながら情報提供をし、6行目でYがその出来事がおもしろかったと伝え、10行目でTが自身の経験の情報提供をしている。ここではTのテリトリーにある経験が1,6,8行目のMとYの発話によって釣り出されている (Pomerantz 1980)。Tが12行目で自分の失敗談を語ると、13行目で聞き手は笑い、それをおもしろいものとして扱っている。23行目で、通信の関係ではっきり聞こえなかったTの飲み物が「ハーブティ」だったことが22行目のMの質問の応答でわかると、Iが27行目で「おしやれ」とほめる。それに対してTは再度12行目の失敗談に少し情報を付け加えて、28,31行目で否定的な情報提供でほめを回避する。そのほめの応答の後のターンは、断片1,2のように再度ほめ直すことはなく、断片3の20Tのようなほめを支持する相槌もなく、32行目で参与者Yが笑い、冗談として扱っている。これは、ほめの対象が断片1-3と違い、能力ではなく、習慣と関係があるものであること、初めからTの経験をおもしろいものとして扱っていることが理由として考えられる。注目すべきは、33行目でIが「あちみたいな」とセリフ発話(山本 2013)を行い、Mが「計算しないと」と経験を共有していないにもかかわらず、IとMがあたかもTと「同じ」経験を共有しているかのようにふるまっている点である。

このように、断片4は、ほめの回避の後に、ほめ手がほめた相手の経験について主張し、経験を再構築する点では断片3と共通しており、どちらも他の参与者の認識性と「同じである」ことを指向し、一連の発話連鎖が終了している。

5. まとめ

本稿では、ほめに対する応答が不同意か回避かによって、職場の同僚である参与者が異なる方法で経験の認識性が「同じである」ことを指向する相互行為を分析した。

ほめに対する応答が不同意の発話連鎖(断片1,2)では、ほめ手とほめの受け手の異なる立場が最後まで続いており、話題転換によって発話連鎖が終了していた。ほめに対しては

めの受け手が不同意を示すと、ほめ手はその不同意を受け入れない発話をし、それを手掛かりとして、その後の方向づけがされ、再度ほめが主張され、ほめ手が交互に言葉の繰り返しやアップグレード、追加説明をすることで同じ意見である者として連携していた。ほめ手とほめの受け手が共通する知識や経験に対するそれぞれの認識性を主張し、ほめ手は共通の成員性、すなわち断片 1 では「研修を受けた同じ経験を共有する者」として、断片 2 では「同じ会社の一員」として、ほめの対象であるほめの受け手に関する知識を主張していた。また、ほめに対する応答が回避の断片 3,4 ではほめ手とほめの受け手の考え方が 1,2 ほど対立することはなく、ほめ手同士だけの連携ではなく、ほめ手の経験の再構築が見られた。ほめに対する回避の応答により、ほめの受け手がほめの焦点を遠ざけ、ほめ手がその回避を受け入れると、それを契機にほめの受け手が「経験を知っている者」としてふるまい、「同じ認識である」ことが指向されていた。その際、断片 3 ではオーバーラップや言葉の繰り返しにより「同じ認識の者である」ことが示されていたが、断片 4 ではほめ手に共有する経験がないため、セリフ発話を用いて、あたかも同じ経験をしたかのようにほめの受け手の経験の知識があるふるまいをし、「同じである」ことに指向し、認識的調和に達していた。

ほめに対する応答が回避の断片は、経験を再構築することで、認識的調和を形成していたが、ほめに対する不同意の連鎖においても、認識的調和を形成しようとするふるまいがなかったわけではない。断片 1 では、ほめの受け手が、2 回目のほめに対して皆のおかげであることを暗示的に示し、微細な調整をしており、断片 2 では、ほめ手がほめの受け手に受け入れられやすいように調整をしていた。これらは、認識的調和の形成に向けてのふるまいであると言える。「同じ」認識に至る過程において、ほめ手が、他の参加者のふるまいを参照し、連携をしていく行為は、断片 1,2,3 で共通していた。言葉の繰り返しや言い換え、追加説明は、ほめに対する応答の共通の認識を共有するための、同じ意見であることの表明である。

断片 1 で見られた追加説明は、串田 (2002) の述べる「引き取り」に似た性質を持っている。「引き取り」は一人が産出中の発話が完結可能点に達する前に、統語的に連続するようにデザインされた発話が別の者によって開始される現象である。引き取りのように複数の参加者で文を構成しているわけではないが、単に何か情報を伝達するためのコミュニケーションではなく、他の参加者に立場を示し、他の参加者の参加を可能にする開かれた特性を帯びるという点が共通している。実際に参加者は、短い発話や笑いを契機に方向付けられた会話に参加し、同じ言葉の繰り返しやアップグレード、追加説明をすることで会話に参加して同じ意見であることを示し、または経験の再構築をすることで同じ経験の認識を持つわれわれとしてふるまっていた。

先行研究では、ほめに対する応答の隣接ペアにおけるジレンマへの対処を分析し、方策が挙げられているが、多人数会話では隣接ペア後の発話連鎖においても、参加者はほめに

対する応答が不同意の発話連鎖では同じ意見を持つ者同士で連携していた。ほめ手はほめの受け手と異なる立場でありながら、ほめ直しは、短く間を置かず発話されており、優先応答の特徴を持っていた。ほめ手が、他のほめ手への同意を示すことで、ほめに対する不同意の応答の後に再度ほめ直す心理的負担を軽減しており、多人数会話の特徴が表れていた。ほめに対する応答が回避の発話連鎖では、ほめ手は受け入れられやすいように調整し、同じような経験を知っている者としての認識的調和の形成に向けての経験の再構築が見られた。そこには多人数会話の特徴である連携と、手掛かりをもとに認識性が「同じである」ことを指向する秩序が見られた。

共通の知識や経験を持つ、職場の同僚のほめと応答の発話連鎖には会話の流れや、参与者の認識性等様々な要素が影響していると考えられ。本稿で取り上げたもの以外にも多様な相互行為が見られる。今後、他のデータを取り上げ、多人数会話におけるほめと応答の連鎖で参与者同士が達成しようとする行為の過程を記述し、分析することが課題である。

【参考文献】

<和文>

- 犬飼英男 (2018). 日本語教科書におけるほめと返答. 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 19, 43-52.
- 榎本美香 (2007). 多人数インタラクションの多様性とダイナミズム ―多人数インタラクションでは何が多くなるのか?―. 社会言語科学, 9(2), 154-158.
- 大滝敏夫 (1996). ほめことばの日独比較. 日本語学, 15(5), 43-49.
- 川口義一・蒲谷宏・坂本恵 (1996). 待遇表現としてのほめ. 日本語学, 15(5), 13-22.
- 串田秀也 (2002). 統語的単位の開放性と参与の組織化 (1)―引き取りのシークエンス環境―. 大阪教育大学紀要, 第II部門, 50 (2), 37-64.
- 串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 会話分析入門. 勁草書房.
- 熊取谷哲夫 (1989). 日本語における誉めの表現形式と談話構造. 言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究. 広島大学教育学部日本語教育学科, 2, 97-108.
- 小玉安恵 (1993). ほめ言葉にみる日米の社会文化的価値観―外見トピックを中心に―. 言語文化と日本語教育. お茶の水女子大学日本語文化学研究会, 6, 22-35.
- 小玉安恵 (1996). 対談インタビューにおけるほめの機能(1)―会話者の役割とほめの談話における位置という観点から―. 日本語学, 15(5), 59-67.
- コーサティアンウォン, サーヤン (2004). ほめ言葉に対する返答スタイルの日タイ比較. 大阪外国語大学修士課程論文.
- 城綾実 (2018). 多人数会話におけるジェスチャーの同期―「同じ」を目指そうとするやりとりの会話分析. ひつじ書房.
- 田辺洋二 (1996). ほめことばの日・英語比較. 日本語学, 15(5), 33-42.

- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析. くろしお出版.
- 張承姫 (2014). 相互行為としてのほめとほめの応答－聞手の焦点ずらしの応答に注目して－. 社会言語科学, 1, 98-113.
- 中川敦 (2016). 遠距離介護の意思決定過程の会話分析－ジレンマへの対処の方法と責任の分散－. 年報社会学論集, 29, 56-67.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008). 特集 相互行為における言語使用－会話データを用いた研究について－. 社会言語科学, 10(2), 13-15.
- 古川由里子 (2001). ほめの条件－書き言葉によるメタ言語データを中心に－. 大阪外国語大学大学院修士課程論文.
- 古川由里子 (2007). 「ほめ」の返答とポジティブ・フェイス－日本語教育への応用を目指して－. 間谷論集創刊号, 99-113.
- 山本真理 (2013). 物語の受け手によるセリフ発話－物語の相互行為的展開－. 社会言語科学, 16 (1), 139-159.
- <英文>
- Gordon, Cynthia (2003). Aligning as a team: forms of conjoined participation in (stepfamily) interaction. *Research on Language and Social Interaction*, 36(4), 395-432.
- Hayano, Kaoru (2011). Claiming epistemic primacy: yo- marked assessments in Japanese. In Stivers, Mondada & Steensig (Eds.), *The morality of knowledge in conversation*, pp. 58-81, Cambridge University Press.
- Heritage, John (2012). The Epistemic Engine: Sequence Organization and Territories of Knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 30-52.
- Kangasharju, Helena (1996). Aligning as a team in multiparty conversation. *Journal of Pragmatics*, 26, 291-319.
- Lerner, Gene H. (1993). Collectivities in action: establishing the relevance of conjoined participation in conversation. *Text*, 13(2), 213-245.
- Pomerantz, Anita (1978). Compliments responses: Notes on the Co-operation of Multiple Constraints. In J. Schenkein (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, pp. 115-132. New York: Academic Press.
- Pomerantz, Anita (1980). Telling my side: “limited access” as a fishing device. *Sociological Inquiry*, 50, 186-98.
- Pomerantz Anita (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: Some Features of Preferred /Dispreferred Turn Shape. In J. M. Atkinson & Heritage J (Eds.), *Structure of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, pp.57-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis I*, Cambridge University Press.